

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

【氏名】 増古 剛久

【所属】(助成決定時) 一橋大学大学院法学研究科博士課程

【研究題目】「アフリカの角と米ソ冷戦との関係に関する国際関係史的研究」

【研究の目的】

本研究の目的は、1970年代のエチオピアとソマリアとの対立(オガデン紛争)と米ソ冷戦との相互関係を分析するものである。米ソはなぜ、どのようにアフリカの角に関与したのか、同時にエチオピアとソマリアはなぜ、どのように米ソ冷戦と関係を持ったのか明らかにすることである。

本研究では、1970年代の米ソ冷戦の中で、米ソがアフリカの角をどのように位置づけていたか、エチオピアとソマリアの指導者は対立を自国に有利に導くために米ソ冷戦をどのように利用したかという観点から、1970年代におけるアフリカの角と米ソ冷戦との相互関係を分析する。

ソマリアでは1991年に政府が崩壊して以来、これまで内戦が続いている。現在のソマリア問題は、ソマリア国内の内戦問題にとどまらず、対テロ戦争、文明の衝突、海賊問題、ソマリア周辺国の利害が絡むなど、紛争の争点が複雑に絡み合っている。本研究で扱う時代は、1991年のソマリア崩壊の始まりを構成するいくつかの歴史的要因を見てとれる。本研究は地域研究にとどまらず、冷戦史研究、冷戦と第三世界との関係との相互関係を分析する上でも学術的意義がある。また本研究の成果を生かし、歴史的な観点から現在のソマリアをめぐる問題に関して平和構築などの分野にも貢献しうる研究となる。

【研究の内容・方法】

本研究は、1977年に勃発したオガデン紛争を議論の中心に据え、アフリカの角と米ソ冷戦との相互関係を外交史・国際政治史の分野に属する。オガデン紛争に関するこれまでの先行研究では、主にカーター政権期を中心とした米国のアフリカの角外交政策に関する研究がなされてきた。これに対し本研究では、主に次の三つの視角から検討した。一つ目には、エチオピア・ソマリアの指導者がなぜ、どのように米ソ冷戦に関わったのか「現地勢力」に焦点を当てて分析した。二つめにはエチオピアとソマリアにはオガデン地域や紛争に対する位置づけの相違が存在したことを考察した。三つめには、米国がアフリカの角のみならず、グローバルな冷戦政策の中でアフリカの角をどのように位置づけるのか、なぜ米ソがアフリカの角に介入するのか認識と実際の行動を考察した。

以上の分析を次の方法で行った。オガデン紛争の時期にはジミー・カーターが米国の大統領であった。したがって、米国での調査ではアトランタにあるカーター・ライブラリーを訪れ、大統領執務室文書(President's Files)、大統領府セントラル・ファイル(White House Central Files)、ブレジンスキー・コレクション(Brzezinski Collection)、アフリカの角特別ファイル(Horn Special)を中心に史料調査を実施し分析した。実際カーター・ライブラリーに足を運んでみると、カーター政権期の対アフリカの角外交文書の公開が2008年~2010年にかけて、新たに進んでいたことがわかった。カーター政権期の軍事・外交政策の史料はメリーランドの国立公文書館(National Archives and Records Administration, NARA)にも保管されている。したがってカーター・ライブラリーに加えて、NARA所蔵の米国の対アフリカ外交政策に関する国務省・国

防省関連文書の調査を行い史料を分析した。2006年から2009年までのケニア滞在中、ケニアやエチオピアの図書館や公文書館で文献・史料調査を行った。当時の雑誌や新聞記事なども収集した。現地勢力の認識と行動に関しては、米国で集めた史料に加えて、ケニア・エチオピアで収集した史資料も活用して分析した。

【結論・考察】

これまでの研究から次のことが明らかになった。第一に、これまでの議論の通りオガデン紛争はソマリアがエチオピアのオガデン地域へ侵入して始まった「国境紛争」である。ただし、エチオピアとソマリアにとってオガデン地域の持つ意味や紛争の動機が異なっていた。エチオピアはオガデン紛争をエチオピアの侵入に対して国境を守るための「領土保全」の立場から紛争を捉えていた。一方ソマリアにとってはオガデン地域を「植民地主義からの解放」のための紛争と捉えていた。ソマリアにとってオガデン地域とは、植民地時代を通じて、ヨーロッパ列強とエチオピア双方による「二重の植民地主義」からの解放を目指す紛争であった。第二に米ソ両国は、互いに相手側がなぜアフリカの角に関与したかという動機に対して正しく認識していたとは言えない。たとえば、米国政府は、ソ連のアフリカの角を巡る外交を、ソ連の膨張政策であったと捉えていた。実際には、ソ連はアフリカの角において極めて難しい外交上の選択を迫られていたのである。第三に、第一番目で明らかになったような「現地勢力」のそれぞれの認識を、米ソ両国とも的確に理解していたとは言えない。

これらのことがエチオピアとソマリアの対立の平和的解決を困難にした。またアフリカの角を巡る米ソの対立は、米ソデタントの揺らぎと、後の「新冷戦」につながる歴史的諸要因のひとつを構成したと考えられる。